

アート・アニメーション・フェスティバル 2011

会 期：2011年8月23日(火)～28日(日) *6日間

会 場：アートスペース A

「アート・アニメーション・フェスティバル」は、映像機器のデジタル化が進行する状況のもと、制作環境の活性化によって、多くの注目すべき作品が生み出されるようになった自主制作アニメーションに焦点を当てた上映会として、2007年にスタートした。その後、アニメーションの歴史を学ぶ上での重要作品や、個展形式による作家特集などの切り口も交え、TVや映画館では上映される機会の少ない作家や作品を紹介してきた。

今年度は、アニメーションを対象とした映画祭としては世界最高峰との評価を得ている「アヌシー国際アニメーション映画祭」での受賞作品を含む、1999年から2007年までに制作されたフランスで高い評価を受けた短編アニメーションを特集した〈レゾルーメント・アニメーフランスが自信を持っておすすめするアニメ作品集〉、国立大学初のアニメーションに特化した映像の専攻として、2008年の開設時より注目を集めている東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻の作品を、東海地区で初めてまとまった形で紹介する特集、当地域の若者からデジタルコンテンツ作品を募集し、ソフトウェアの振興を促す機会としてスタートした「愛知デジタルコンテンツコンテスト」の、昨年(第4回)の一次審査通過作品の特集という、三つの特集によりプログラムを構成した。

〈レゾルーメント・アニメ〉は、海外の短編アニメーションを観るチャンスが少ないという現状において、貴重な鑑賞の機会として観客から歓迎された。また、愛や労働といった概念や、犬や狼といった動物に対する、日仏の感覚的な違いが肌身で感じられる機会ともなり、発見があったとの声も聞かれた。〈東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻作品集〉は、学生による短編作品としてはほぼ最高レベルに位置するのでは、と思わせるクオリティの高さで注目を集めた。中でも、TVアニメ的なボキャブラリーやセンスを導入した、現代的な感覚の植草航『やさしいマーチ』(2011年)は、来場者から「もう一回観たい」という声が寄せられなど、好評だった。「第4回愛知デジタルコンテンツコンテスト一次審査通過作品」のコンピューター・グラフィックスの可能性を追求する作品は、手描きや立体など伝統的手法を基調とする藝大作品と、良い意味で好対照を示していた。